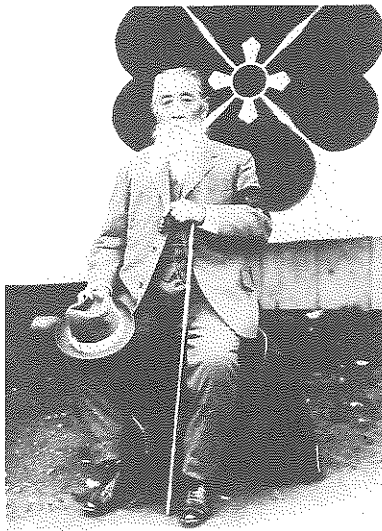




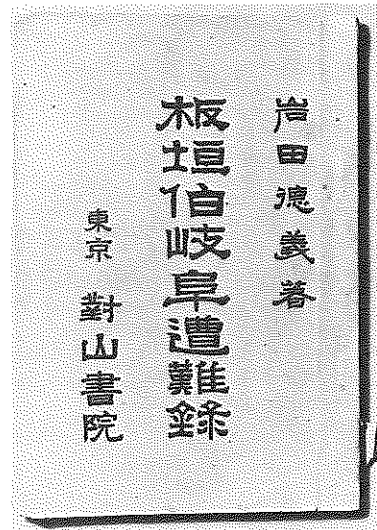
板垣退助遭難之図 (1882年, 岐阜中教院にて)

本多政俊氏蔵



板垣退助

堀部満氏蔵

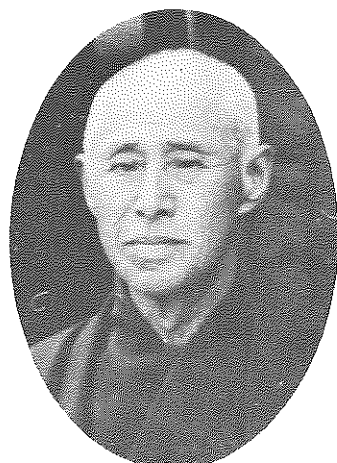


『板垣伯岐卓遭難録』(1908年発行)

松本平治氏蔵



岩田 徳義 【板垣伯岐阜遭難録】所収



小池 勇 (1925年6月, 70歳)

岐阜県歴史資料館蔵



『岐阜新聞』第1号 東京大学明治新聞雑誌文庫蔵



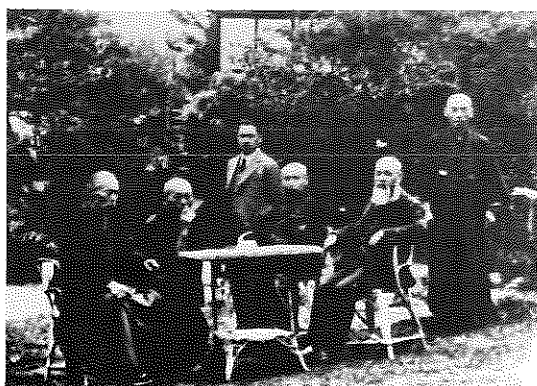
山田 頼次郎

堀部満氏蔵



本多政直 (1912年4月, 68歳)

本多政俊氏蔵



村山照吉(左端)と山田永俊(右から二人め)

内藤満寿子氏蔵



堀部 松太郎 堀部満氏蔵



山田 永俊 堀部満氏蔵



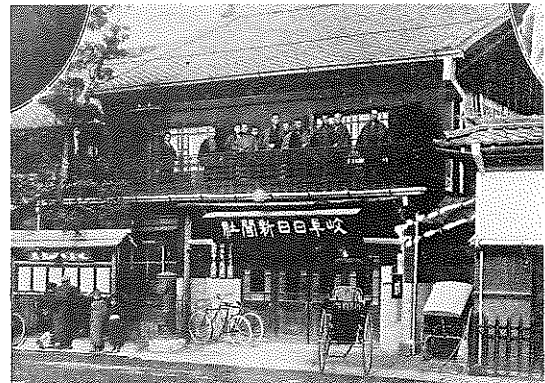
小野 小野三 『岐阜県名士録』所収



佐久間國三郎 『県政五十年史』所収



濃飛日報社 『官民之宝鑑』所収



岐阜日日新聞社 『官民之宝鑑』所収

【写真解説】

板垣退助岐阜遭難

岐阜県遊説中の自由党総理板垣退助は、1882年4月6日、岐阜中教院における演説のあと、刺客に襲われ負傷した。「板垣死すとも自由は死せず」との名言をはいたといわれる。この事件にさいし、全国各地から多数の自由党員やその支持者らが集まっており、板垣遭難は、本県はもとより、全国的民権運動のクライマックスをなすものであった。

『板垣伯岐阜遭難録』

板垣岐阜遭難事件に関する著書論文は多いが、この記録は、岩田徳義が1908年に発行したものである。

岩田徳義

1853年生、三河岡崎藩士族、77年『愛岐日報』主筆、79年岐阜移住以来、多数の新聞・著書を刊行し、県下民権運動および自由党の理論的・実践的指導者として活躍し、また法律研究会等の組織を通じ、広範な政治的啓蒙活動を行った。さらに岐阜県自由党と自由党本部を結ぶ重要な絆の役割を果たした。94年衆議院議員選挙に立候補して敗れて以来、教育活動に尽力し、明治末年以降東京で麻布学館を経営、育英事業に従事した。

『岐阜新聞』第1号

1873年4月、県下最初の地方紙として発刊されたものである。その後幾度も『岐阜新聞』と称する新聞の刊行をみたが、何れも永続せず断絶的発行にとどまっている。『愛岐日報』編集の経験をもつ岩田徳義は、来岐した79年6月、県下最初の日刊新聞『岐阜新聞』創刊に参画しているが、その後同紙を退社し、同年7月、月刊紙『幼稚新聞』を創刊している。

本多政直

1843～1912、肥後熊本藩主細川侯庶子、三河岡崎本多家の養子となる。武術にすぐれとくに薙刀に長じていた。74年ごろより、岐阜白木町に演武場を設け、武蔵郡上有知(現美濃市)出身の民権家島森友吉らと子弟養成に当った。県下民権運動草創期からの活動家として国会開設請願運動に参加、自由党員となり、政談演説等民権活動をつづけ、県下自由党の長老として重きをなした。

小池勇

1854～1940、可児郡池田村(現多治見市)、豪農兼医家出身、80年教職を辞し、名古屋に出て『愛岐日報』記者となり、82年同志とともに『経世新誌』・『学事新報』発行などの出版活動にしたがい、また尾張・三河・美濃各地の政談演説

岐阜県の自由民権運動にかかわる主要な写真を掲載した。ここでは、『岐阜県史』をはじめとする自治体史、民権関係の諸論文などに依拠し、ごく簡単に解説しておきたい。

会等広範な民権活動を行い、83年帰郷後も同志と連絡をとっている。84年飯田事件の嫌疑で逮捕、86年静岡事件関係者として処刑され10年間の獄中生活、97年出獄後は、郷土の村長として、あるいは岐阜県会議員、同県会議長(1908年)として活躍している。

山田頼次郎

1853～1927、方県郡西改田村(現岐阜市)出身、県下自由党の主要人物として、82年創刊の濃飛自由党機関紙『濃飛自由新聞』の編集兼印刷人、89年『濃飛日報』創刊の発起人となっている。明治20年代後半にいたるまで、岐阜周辺地域の在村民権活動家として、民権運動発展に大きく寄与した。ことに、濃尾震災後の西別院事件、さらに震災費不正追及運動や小作争議などにおいて、積極的に運動を組織し、県下自由党内の農民派総帥として活躍した。

村山照吉

1855～1942、方県郡村山村(現岐阜市)出身、79年11月の愛国社第三回大会に、武蔵郡関村柴山忠三郎、恵那郡岩村安田節蔵とともに、岐阜県からはじめて参加、県下民権運動の草創期から、濃飛自由党の結成・板垣来岐等民権運動最高揚期にかけての中心的活動家である。その活動は、明治20年代にひきつづき、『濃飛日報』の創刊に尽力。90年2月、彼の執筆にかかる同紙社説「憲法発布の第一年紀に就て」が不敬罪に問われ、入獄している。

堀部松太郎

1857～1935、席田郡仏生寺村(現本巣郡余貫町)出身、仏生寺村戸長兼席田用水取締(井頭)の彼は、82年濃飛自由党加盟、84年以降自由党系の県会議員として県令小崎利準に対抗、民権活動の中軸となっている。88年創設の濃飛日報社初代社長となり、また91年濃尾震災後、山田頼次郎らと「震災救済同盟会」を発足させ、県民大会を開いて対県交渉に当たっている。西別院事件や震災費不正追及運動の激化のなかで、93年小崎知事辞任におこむ中心的役割を演じた。

小野小野三

1870年生、方県郡小野村(現岐阜市)出身、庄屋・苗字帯刀の家柄、同郷の県下自由党指導者山田頼次郎・西川藤太郎らの影響を受けて民権活動を展開している。88年濃飛日報社通信員、90年自由党加盟、91年同社へ正式入社以来1919年まで同紙編集に従事している。ことにその間、発行兼編集人として第一線で活躍、厳しい弾圧下二度にわたる入獄を体験、その生涯の大半を『濃飛日報』の歩みとともにしている。

濃飛日報社

本社岐阜県4番地、三大建白・大同団結運動の波及および国会開設に向けて、政治的関心が高まるなかで、『濃飛日報』は、県下自由党の機関紙として1888年創刊されている。改進黨系の『岐阜日日新聞』との間に激しい対立と論戦が行われた。『濃飛日報』にたいする弾圧は厳しく、90年3月1日には『第五濃飛日報』を発行せざるをえない状態であり、その蒙った筆禍は、治安妨害15回・発行停止13回におよんでいる。

山田永俊

1872年生、方県郡西改田村(現岐阜市)出身、年少のころより自由党にどうけいし、同党県会議員堀部松太郎の指導を受けて政談演説を行い、89年『濃飛日報』入社、編集兼記者として活躍している。二度にわたり上京、大垣出身の医者で自由党員江馬春照方に寄寓、東京帝国大学で眼科専攻、1901年帰郷、岐阜で眼科医を開業している。その後岐阜市会議員・同議長など歴任、20年には衆議院議員となっている。

佐久間 国三郎

安八郡詫池村(現海津郡平田町)出身、豪農、1876年、地価算定法につき、建言書を地租改正事務局総裁大久保利通へ提出。79年西南濃家農層泰盛の啓蒙結社砥柱社・81年再組織された濃飛共立義会の構成員となっており、同年以降、資産家名望家層を代表する改進黨系の県会議員として活動している。91年民党連合としての進歩倶楽部結成以来、自由党系と行動をともにし、同年8月大井憲太郎来岐を機に、自由党に加盟した。92年非王辰派(自由党系反知事派)首領として、濃尾震災救済費問題で、小崎知事追及運動の先頭にたつて活躍、93年には県会議長に就任している。

岐阜日日新聞社

『岐阜日日新聞』は、本格的郷土日刊紙として、1881年5月15日創刊され、発行所は厚見郡今泉村(現岐阜市)共進社内におかれた。『自由党史』によれば、同紙は無所属とされ、自らも中立をひようぼうしているが、当時においては、明らかに改進黨系の新聞として、自由党と厳しく対立していた。改進黨系の組織活動に積極的に参加し、明治20年代にいたっても、自由党の過激主義を批判し、県下における改進黨の代弁者となっていた。

(丹羽 弘)